

研究ノート：ナ-タンは死なず

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 直之輔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/5234

〈研究ノート〉

ナータンは死なず

佐々木 直之輔

1. はじめに

2001年9月11日、国際的イスラム・テロ組織アル・カーイダによるとみられるアメリカ中枢同時多発テロが国際的に人心を震撼させた。それは同系の唯一神をいまだく2つの一神教の文明間の衝突であったと一般的に理解されている。それはそれで正当な理解であろうが、同時にそこにはアメリカに対するイスラム世界の深い積年の憎悪があったこと、しかもこのテロが自分たちの信ずる神の名において行われたことは忘れられてはなるまい。かつて、キリスト教世界ヨーロッパは自分たちの信ずる神の名において十字軍を異教の地に送りこんだ。今、かれらは「悪に対する十字軍」(Kreuzzug gegen das Böse)を再び送りこんでいるのであるが、それはイスラム世界から見る時、テロがジハードとなりかねない類の十字軍であろう。イスラム世界がその後のアメリカをはじめとするキリスト教世界によるイラク戦争を「新たな十字軍」と呼んだのも故なしとしないのである。この両文明間に和解の道はないのだろうか。

この同時多発テロに先立つおよそ1年半前、イエス・キリスト生誕2000年にあたり、ローマ教皇ヨハネ・パウロⅡ世は聖地への巡礼の旅へ出発した。教皇自身、この旅は何よりも精神的 (spiritual) なものであると力説して

いるにしても、この旅にはいわゆるパレスチナ問題、ナチズムに対し終始一貫して曖昧な態度を取った当時のローマ・カトリック教会の問題、アウシュヴィッツという言葉に集約されるユダヤ人虐殺の問題等々が必然的に伴うこととなり、ジャーナリズムは時には執拗なまでにこの種の問題を追いかけている。本稿ではしかしこの種の問題はあえて避け、十字軍への言及といわゆる宗教間対話の報道を追ってみたい。

調べ得たかぎりでは、十字軍への言及は2000年3月21日のフランクフルト一般新聞の記事に見られる。カイロ発3月20日の「教皇訪問への分裂した期待」と題する記事は次のようである。「ヨルダンではヨハネス・パウロⅡ世に対する期待はさまざまである。多くの人にとってローマ・カトリック教会の頭^{かしら}は平和の使者であるが、しかし他の人々のはかれの平和のミッションには疑念を抱き、キリスト教世界ヨーロッパのイスラムやイスラム教徒に対する敵意〔憎しみ〕(Feindseligkeit)とまでは言わないにしても、十字軍兵士にまで遡る反感〔嫌悪感〕(Abneigung)を教皇は代表していると思っている」。引用文中の「十字軍兵士」には21世紀の、近代兵器で武装した「新たな十字軍」の兵隊たちの影が微妙に絡み合うように見える。

3月20日、教皇はアンマン空港から直接ヨルダンのネボ山(mount Nebo)に向った。ネボ山はモーセがはじめて「乳と蜜の流れる約束の地」をはるかに眺めたと言われる山である。そこで教皇はユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒たちの和解を祈ったとフランクフルト一般新聞は報道している(3月22日付き)。

また南ドイツ新聞はテルアヴィヴ発として「教皇はユダヤ教徒とキリスト教徒に対話と呼びかける」と題して次のように報じている(3月22日)。「聖書の地への巡礼の旅で、教皇ヨハネス・パウロⅡ世はヨルダンからイスラエルに到着した。(中略)教皇はエルサレムとパレスチナ統治のベツレヘムで、ユダヤ教徒、キリスト教徒、イスラム教徒にとって聖なる蹟^{あと}を訪ねたいと希望している(筆者注—ユダヤ教徒にとっては「嘆きの壁」、キリスト

教徒にとっては「聖墳墓聖堂」、イスラム教徒にとっては「岩のドーム」などであろう)。イスラエルに到着した際、教皇はユダヤ教徒とキリスト教徒の間の対話を推し進め、偏見を克服することが必要だと語った。それに先立つヨルダンの首都アンマンでのミサで、7万人の信者を前に教皇は3つの宗教に平和的共存を呼びかけている」。

およそ400万のヨルダン人のうち3から6パーセントほどがキリスト教徒であるが、アンマン在住のキリスト教徒の代表者たちに、土地のカトリック教区におけるだけではなく、近東のキリスト教徒と他の諸宗教との間においても、友愛と共同作業のきざしが一層促進され得るように自分と共に祈って欲しいと教皇は呼びかけ、「あなた方の未来は、統一と連帯にかかっている」と結んでいる。

国内の報道としては、3月23日のジャパン・タイムズが一面トップに教皇と3人の子供たちの写真を掲載し、次のように説明を加えている。「イスラエル到着の際、空港に出迎えた3つの宗教の3人の子供たちからプレゼントされたイスラエルの土製の鉢に教皇ヨハネ・パウロⅡ世は手をそえている。11歳のイスラム教徒 Walid Sitawi 君、11歳のユダヤ教徒 Dafna Bar-Sadeh さん、そして10歳のキリスト教徒 Mario Hadar 君、いずれもナザレの出身である」。

教皇が呼びかけた諸宗教間の対話は古くて新しい問題であり、それがどのような実効をもたらし得たのかあるいはもたらし得るのか疑問なしとはしないが、その種の対話の必要性は大方の認めるところであろう。疑問なしとしないのは、「世界平和を祈念する世界宗教者会議」といった類のものは実効に乏しく、宗教間対話も双方の信念の開陳にとどまるだけで、生産的なものになることが少ないと聞くからである。その上、宗教間対話が具体的成果をもたらし得ても、その成果が一般の信者に何等の影響もおよぼすことがないように思われるからである。ひとつだけ例をあげてみたい。1967年来の「禅とキリスト教懇談会」における宗教間対話は具体的に第2バチカン公会

議に影響を与えたと言われている。すなわち、「普遍なる教会は、他の諸宗教の中に見出される真実で尊いものは何も退けない。(中略)それらは教会が保持し提示するものとは多くの点で異なっているが、すべての人を照らす『真理』のある光を示すことが稀ではない」という宣言は前記の懇談会のメンバーであった一カトリック神父によって起草されたものと言われている。キリスト教以外の諸宗教にも「真理の光」を認めるという新しいパラダイムによって、このドイツ人神父はカトリック教会刷新の方向を指し示したのである(以上は『大乘禅』(中央仏教社 2000年9月号)による)。

しかしながら、一般のカトリック教会の、そして一般の信者のこの新しいパラダイムへの反応はきわめて冷やかであったことは、その後のかれらとの会話から容易に推察することができた。この新しい理念もかれらの宗教的信念に結局は何等の変化ももたらしはしなかったのである。あるいはそうした有り様が宗教的^{よう}真実態であるのかもしれない、そこに変化を求めるのは合理に過ぎる要求なのかもしれない。

3人の子供による教皇への鉢のプレゼントも当局によるひとつの宗教間対話的演出であることは容易に察せられるが、このセレモニーを機に3人に代表される3つの宗教世界が何等かの形で平和的共存へ向けて友愛的に接近することができたのなら意味なしとはしないであろう。

キリスト教世界ヨーロッパのドイツ語文化圏で、しかもまだ一神教による価値の一元的世界であるがゆえに宗教的不寛容が正義であった時代に、前記の3宗教の平和的共存と宗教的寛容を説いたのはG.E. レッシング(1729~1781)であった。次にかれの『賢者ナータン』(Nathan der Weise 1779)を取りあげたい。

2. 『賢者ナータン』

レッシングが生きた時代は理神論(Deismus)、すなわち盲目的信仰を脱

し、宗教を宗教たらしめている要因をさぐり、合理的宗教の確立をめざした自然的宗教 (natürliche Religion) と正統派神学とがせめぎあっていた時代である。レッシングは前者の立場から友人の自由思想家、ハンブルク大学の H. ライマールスの遺稿を『無名氏の断片』(1774~1778) として刊行したが、それによって正統派の牧師 M. ゲッツェと論争することとなった。しかしこの論争が当局によって禁止された時、レッシングは自分の宗教的信念を『賢者ナータン』にドラマ化したのである。ユダヤ人ナータンのモデルは友人で啓蒙思想家として信仰の自由を説いたユダヤ人、M. メンデルスゾーンであった。

舞台は十字軍が侵攻していた中世のエルサレム。人々に「賢者」と呼ばれているユダヤ人の富裕な商人ナータンは、財政的に逼迫している回教王ザラディンよりユダヤ教、キリスト教、イスラム教のうちのどれが最もよい宗教であるかと問われる。然るべき答えをナータンが出せない時、ザラディンはナータンに献金を強要するつもりであった。ナータンはその問いに直接的に答えることは避け、『デカメロン』に範を取ったひとつの以下のようなメールヒェンを物語る (訳文は大庭米治郎訳『賢者ナータン』(岩波書店 大正13年) による)。

ナータン 往昔^{むかし}東方に一人の男^{ひと}がありました。値^ちふみの出来ぬ高價な指環を愛人から貰^{もら}って所有^{もつ}てみました。寶石は蛋白石で無数の美しい色彩に燦^{きら}めき、その上こんな不思議な力^{ちから}がありました。誰でも、その秘力を信じて差して居ると、神様と人間の眼に快きものとなれるのでございます。それで、東方の人が滅多にそれを指から外さうとしなかつたのは、かつまた永久に子孫へ傳へるやうに堅い決心をしたのは決して不思議ではございませぬ。かういふことにいたしました。その指環を息子の中でも一番可愛がっていた者^{のこ}に遺し、そしてかういふことに決めました。その息子が、今度^{この}は自分の一番愛している息子にそれを傳へること、そして何時でも、誕生

の前後に拘らず一番愛されている者が、たゞ指環のおかげで家の頭目に、
主になるのだといふ。——おわかりでございますね、皇帝様。

ザラデイン よくわかる。さあ次を！

ナータン 指環は息子から息子へと傳はつて、遂に三人の息子の父に渡りました。その三人の息子は均しく父に従順で、父の方でもみんなを同じ様に愛しないでは居れなかつたのでございます。たゞ折々、——誰か一人だけが傍にいて、外の二人は父の心臓の滴に露はぬやうなとき、——父には一緒に居る息子が一番その指環に價するやうに思はれました。そして到頭善良な氣の弱さから皆の者に銘々その指環をやるやうに約束することになりました。暫くはそれで済みました。——然し死が近づいた時、善良な父は途方にくれました。自分の言葉を信用してゐるみなの子供の中で、誰か二人だけは心を傷けねばならぬことが父を苦めました。——何うすればよかつたでせう。そこで彼は秘かに鑄職の所へ人を遣はして、その指環を雛型として別に二つの指環を造りました。そして費用や手数を厭はずに、そつくり雛型に似せて作るやうに吩咐けました。鑄職はそれを首尾よくしおほせました。指環が出来て来た時には、父の眼にさへ何れがもとの指環だか識別がつかなくなつた位でございます。満足に思ひ、そして喜びながら、父は息子達を一人々々呼び寄せました！一人々々に祝福をして、——指環を遣つて、——そして息を引取りました。——お聞きでございますか、皇帝様。

ザラデイン (當惑して顔をそむける)。聞いてゐるよ、聞いてゐるよ！
——早くその童話を云つて終へ。——直きにすむだらうね。

ナータン これですみました。話の續きは申しあげずともわかつてゐますから、——父が死ぬが早いか、息子達は指環を持つて来て銘々がわしこそ家の主だと主張いたしました。穿鑿や口論があつて、遂に法廷へ出ることになりました。がそれは徒勞に歸しました。本物の指環を鑑別けることは出来なかつたのでございます。——(皇帝の返答を期待しながら、暫く

間をおいて。) 丁度、私達に今問題となつてゐます真正の宗教と同様に。

ザラデイン なに。それがわしの間に對する答だと申すのか。

ナータン 何ういたしまして。ほんの辯解に過ぎないのでございます。父が鑑別けのつかぬやうに故意と拵へさせておいた指環を、私なぞには到底鑑別けるやうな自信はございませんから。

ザラデイン 指環を！——わしを翻弄する氣か！——わしの考では、今わしが申した宗教はそれぞれ鑑別けがつくではないか。衣服や飲食の末にまで！

ナータン ですが、宗教の基礎といふ點に關しては違ひます。と申しますのは、何んな宗教でも基礎を歴史の上においてゐないものはございませんから、それが成文にしる、傳説にしる。——さうして、歴史といふものはただ信仰で受け容るべきものではございますまいか。——さうしますれば、一體何んな信仰が最も奉じ易いものでせう。自國の信仰ではございませうまいか？ 血を同じくしてゐる人達の信仰では？ 兒童の時分から私達に愛の證據を示してくれた人達の？ 欺かれる方が私達に有益な場合でなければ、決して私達を欺かなかつた人達の信仰ではないでせうか。——何うして私が自分の祖先に抱いてゐます信仰が、あなたがあなたの御先祖に對する御信仰よりは薄いと云へませうか。またその逆のことが云へませうか。私の先祖に反對をお唱へになるのを禦がうとして、私があなたに、御先祖に虚言をお責めなさいなぞと要求したり出来るでせうか。またその逆のことが。同様のことが基督教徒についても申せます。私の申すことは間違つてゐますか。

ザラデイン (活ける神様にかけて！ この男の云ふことは正當だ。わしは黙つてゐる外ない。)

ナータン 指環の話に戻りませう。今も申したやうに、息子達は法廷へ出ました。そして銘々、その指環は父の手から直々に貰つたと判官に誓言いたしました。——事實その通りに相違ないのです！——そして他日指環

の優先権を遣らうといふ約束をして貰つて、それから随分経つてから貰つたものだと言いました。——それも實際のことです！——皆の者は誓ひました。父が自分を欺く筈はないと。さうして父に、あの愛すべき父にそんな嫌疑をかける位なら、むしろ兄弟達に裏切の罪を鳴らしたい、大概のことならその二人には善い點ばかりを信じてゐたのではあるが。そして裏切の罪を露け出してその復讐をしたいと思つてゐると言いました。

ザラデイン　すると、判官は？——お前が何んなことを云はすか聞きたい。續けてくれ！

ナータン　判官は言いました。お前達が父親をこゝへ連れて來ることが出來ないとすれば、わしはお前達にこの裁斷の座から退がれと云ふ外はない。考へて見よ、わしは謎を解く爲めにこゝに坐してゐるのであらうか。それともお前達は、本物の指環が口を開くまでそこに居坐つてゐようといふのか。——が待て！　本物の指環は人を愛せらるゝ者とする、神と人間の前に喜ばるべきものとする不思議の秘力を持つてゐると云つたね。その一事が決定しなければならぬ！　贋造の指環はさういふ秘力を持つてゐないのだから！——さあ、誰が一番お前達の二人から愛されて居るか。——さあ、返事をしろ！　黙つてゐるね。指環は内側へしか働かないのか、外部へは効驗がないのか。お前達はみんな自分だけしか愛してゐないのか。——おゝ、それではお前達は三人とも偽はられた偽はり者なのぢや！　お前達の指環は三箇とも本物ではないのぢや。本物の指環は失はれたのであらう。その損失をおほふために、または填めあはすために、父親が失つた一箇の指環の代りに新たに三箇拵へさしたのであらう。

ザラデイン　面白い！　面白い！

ナータン　判官は尚も續けて言いました。わしの助言が欲しいのでなかつたら、あくまでも判決を望むなら、退がつてくれ！——それでわしの助言と云ふのは、事實をありの儘に續けてゆけといふことにあるのだ。お前達が銘々父親から指環を貰つたのなら、銘々自分の指環は本物だと確信す

るやうにしる。多分父親は、家に一箇の指環が専制を恣にしてゐることに
 もはや耐へられなくなつたのだらう！——さうして屹度お前達三人を愛し
 てゐたのだ、同様に愛してゐたのだ。一人を恵むために二人を虐げるやう
 なことがしたくなかつたのだ。——さあ！ みんな、公正な、偏見に囚れ
 ない父親の愛にあやかるやうにしる！ 銘々その寶石の秘力が顯れて來る
 やうに競へ！ 柔和と、熱い友愛と、仁慈と、衷心からの神への服従とで
 もつてその秘力を顯はすやうにせい！ さうして、寶石の秘力がお前達の
 子孫の代になつて顯れてきたならば、わしは幾百萬年ぶりに再びお前達を
 この座の前に喚び寄せよう。その時にはわしより更に賢明な人がこの座に
 即いてゐられるだらう、そして判決をお下しになるだらう。行け！——賢
 き判官はさう申しました。

ザラディン 神様！ 神様！

ナータン ザラディン様、あなたが御自身をこの賢明な、約束された人
 だとお考へなすつたなら……

ザラディン (ナータンへ驅け寄り彼の手を握る。此場の終までその手
 を離さない)。この塵のやうなわしが？ 無に等しいわしが？ おゝ、神
 様！

ナータン 何うなさいました、皇帝様。

ザラディン ナータンよ、愛するナータンよ！ お前の判官の謂ふ、幾
 百萬年はまだ經つてゐない。——その裁斷の座はわしなぞの即くべきもの
 ではない。——行け！——行け！——だが何うぞわしの友人であつてくれ。

以上が汎ヨーロッパ的に知られた3つの「指輪のたとえ」(Ringparabel)
 である。

ナータンの1粒種の娘レヒャーは火事の際、ザラディンに命を助けられ自
 由の身となった聖廟騎士(Tempelherr)、すなわち十字軍兵士に救われた
 経緯がある。レヒャーが実はナータンの実子ではなく、10数年前に1人の

馬丁がナータンにあずけたキリスト教徒の子供であることを知った聖廟騎士は、ナータンに対する誤解からこの事実をエルサレムのキリスト教会の長老に密告する。当時、ユダヤ人がキリスト教徒の子供を自分の子供として育てることは「聖霊に対する罪」(マタイによる福音書 12-13)として、その内実は誰にも不明でありながら、最も恐ろしい罪とみなされていた。聖廟騎士の抗弁にもかかわらず、長老がリフレインのように繰り返す言葉は「ユダヤ人は焚刑に処せられねばならぬ」であった。このことをナータンに伝えた長老配下の修道僧(かつての馬丁)はナータンから次のような告白を聞く。

修道僧 (…………) あんな年頃の^{こども}児童には、何よりも、基督教なぞよりも愛が必要です。野獣の愛情でもよろしいから。基督教徒には何時だつてなれます。お嬢様があなたのお眼にさへ達者で善良に成人してゆかれたなら、神様のお眼には何時までももとのまゝで映るでせう。それにまた、基督教といふものは猶太教の上に築かれたものぢやありませんか。私はいつも腹が立ちました。涙がこぼれました、^{すくひぬし}救世主様御自身もやはり猶太人であることを、基督教徒が全く忘れてゐますので。

ナータン 善き兄弟よ、憎悪と偽善がわしに立ちかゝつて來た時に、——あの^{おこなひ}行爲の爲めに——おゝ、あの^{おこなひ}行爲の爲めに！——あなたは屹度わしの辯護者であつてくれるでせう。——あなたに、あなただけにお話しませう！ だが、それはあなたと一緒に墓場へ葬むるやうにして下さい！ これまで虚榮心に誘はれて他人に話したことは一度もありません。あなただけに話すのですよ。單純な、敬虔な人にだけ話すのですよ。そんな人だけが、神様に服従してゐる人間が爲し得る^{おこなひ}行爲を理解してくれるのですから。

修道僧 感動してられますな、眼に一ぱい涙がたまつてゐます。

ナータン 私は^{こども}嬰兒を連れて來られたあなたとダルーンでお會ひしましたね。だがあなたはご存じなかつたでせう、數日前にガータで、基督教徒が

猶太人を婦女や兒童に至るまで鑿殺にしたことを。ご存じなかつたでせう、その中には、七人の有望な息子と一緒にわしの家内も混つてゐました、兄の家へ遁しておいたのですが、みんなと一緒に焼き殺されたに違ひありません。

修道僧 正義の神様！

ナータン あなたが來られた時には、三日三夜といふもの、灰燼に塗れて神様の前にひれ伏してゐました。そして泣いてゐたところでした。——泣いてゐた？ いやそればかりではない。神様をお非議めました、憤怒に燃え、狂亂し、自分と世界とを呪つてゐました。基督教に對して執拗な憎惡を誓ひました。

修道僧 おお！ あなたの氣持がよく解ります！

ナータン 所が理性がだんだんと蘇つてきました。柔かい聲で云ひました。「洵に神はゐます！ あれは神意の豫定だ！ さあ！ 時が來た！ 永い間思索へてゐたことを實行しろ。やる氣さへあれば、實行が思索より六ヶ敷い筈はない。起て！」——わしは起つた、そして神様に叫むだ。やつて見ます！ それがあなたの聖意であれば！と。——さうしてゐる所へあなたは馬から降りてわしに嬰兒を渡されたのです、外套に包まつたまゝで。——その時あなたが何んなことを云はれたか、またわしが何を云つたか、それは忘れて終ひました。たゞこれだけのことは覚えています。嬰兒を抱いてゆき、それを寢床に載せた、接吻をしました、跪いて、啜り泣きながら叫むだ、神様！ 七人失くしたうちで一人だけ戻つて來ました！

修道僧 ナータンさん！ ナータンさん！ あなたこそ基督教徒です！ 神様にかけて、あなたこそ基督教徒です！ こんな立派な基督教徒はかつてなかつた！

ナータン お互ひに恵まれてゐる！ あなたから見てわしを基督教徒とする所以が、わしの眼にもあなたを猶太教徒に見せますから！——だが何時までも嗟嘆き合つてゐる場合ではない。今や實行が必要です！ さうして、

七重^{ななへ}の愛がこの一人の異國の娘にわしを縛り着けてるやうが、また、娘を取られてそれでもう一度あの七人の息子をば失はねばならないといふことは實に考へただけでも死ぬ程苦しいことであつても、——神意^{もが}が彼女^ををわしの手から要望^{のぞ}むならば——わしは服従ひませう！

最終場面で、聖廟騎士とレヒャーは兄と妹で、ザラディンはかれらの伯父であることが判明し、大団円となる。すなわち、少なくともこの人物関係においては3つの宗教は平和的共存関係を保つことができたのである。このような『賢者ナータン』がドイツでどのように受容されたのか次に見てみたい。先どりして言えば、このドラマの受容史はユダヤ人解放の歴史であった(以下の叙述は主に Barbara Fischer の Nathans Ende? (Wallstein, 2000) と Angelika Overath, Navid Kermani, Robert Schindel の3人による Toleranz. Drei Lesarten zu Lessings Märchen vom Ring im Jahre 2003 (Wallstein 2004) による)。

3. 『賢者ナータン』受容小史

その内容からして、このドラマがナチズムの政権下で12年間上演され得なかったことは容易に理解できるし、この政権が崩壊して4ヶ月、1945年9月7日午後4時30分、ベルリンのドイツ劇場が戦後初の出し物をこのドラマとしたその心情も容易に理解できるように思われる。すなわち、「賢者のナータンに復帰することは、かつてこのドイツにあった別の文化、別の精神世界へ帰ることであり、罪の贖いの作品としてではなく、寛容の精神を蘇生させるものとして『賢者ナータン』が上演されるべきであるという点で、1945年、すべての人々の意見は一致していた」のである。

その夜のことを観客の1人は次のように書き留めている。「レッシングのクレド(宗教信条)を語る賢い老ユダヤ人の足もとで人々は泣いていた。多

くの観客は心の抑制を失い、ナータンが修道僧に心の秘密を打ち明け、(七人の有望な息子と妻を焼き殺された) ガータでのキリスト教徒による残虐行為について述べた時、むせび泣きながら席をはなれた」。

「ユダヤ人は焚刑に処せられねばならぬ」というエルサレムの長老の断罪の言葉は数世紀を経て、キリスト教世界ヨーロッパにおいて現実のものとなったのである。舞台上で演じられるドラマが、現在ないしは過去の現実の事象とのつながりを持つべきものなのかどうかについては議論があるとしても、この年以降『賢者ナータン』やその種のドラマが上演されたことは、見失われてしまったかに見えるヒューマンイズムを再修復しようとの一般的志向と同じものであったろう。そのかぎりでの演劇人たちの選択は理解できるものであろう。

しかしながら歴史を振り返ってみると、次のような冷厳たる事実気付かざるをえない。すなわち、ヒトラーが独裁権を獲得した1933年以前のヒューマンイズム的、理性的ドイツとの結びつきを求める努力は、暴力政治と恐怖政治の12年間がドイツ史上の突発的、例外的事象であったなどとのあやまてる歴史認識を暗に認めることになりかねないのである。このドラマの歴史はユダヤ人の解放の歴史ときわめて密接に結ばれており、今日のみで見れば、あの恐ろしい悲劇的事件のすぐあとで、静かにヒューマンイズム賛歌に復帰して行くことは容認され得ないようにも見えるのである。

このような意識のもとで大胆に「ナータン(脱)構築」(Nathan(de)-konstruktion)を試みたのはG. タボリの『ナータンの死』であった(Tabori, George: »Nathans Tod« nach Lessing«. Uraufführungstext im Programmheft des Residententheaters. München, 1991)。タボリは1914年ハンガリーに生れたユダヤ系の作家にして演出家であるが、ドイツに対する信頼性をめぐって次のような話が伝えられている。甥のベルリン留学の計画を聞いた伯母〔叔母〕はただレッシングの『賢者ナータン』の存在によってのみ、自分の昂る気持を抑えることができたのである。1932年、ナチ前

夜のことである。「『賢者ナータン』が(ドイツに)存在しなかったら、お前をドイツに行かせやしない」。150年前の精神的遺産であるこの作品を想起することによってのみドイツに対する不安を抑え、ドイツに対する信頼を保ち得たユダヤ人たちが存在したことはまことに驚くべきことであった。

しかしながら、時代が変動し、信頼を寄せていた価値が崩壊し、人類が未経験の暴力的事態が出来る時、従来の調和的世界認識が幻想に過ぎなかったことが暴露され、認識の新たな枠組みが要求されてくるだろう。M. ホルクハイマーと Th. W. アドルノは、啓蒙的理性はその方向に人類を導かないはずであったのに、「何故に人類は、真に人間的な状態に踏み入っていく代りに、一種の新しい野蛮状態に落ち込んでゆくのか」という問いを發した(『啓蒙の弁証法』徳永尙訳 岩波書店。筆者注—本書の執筆時期は1933年から1944年であった)。タボリが「ナータンの死」を語った時、かれの念頭にもアウシュヴィッツに象徴される「野蛮状態」があったであろう。「アウシュヴィッツ後のナータン」(Post-Auschwitz-Nathan)に3つの指輪のたとえを事新しく語らしめることが如何に虚偽性に満ちた行為であるかを『ナータンの死』は暴露する。レッシングの最終場面の登場人物たちの大団円の抱擁も、そらぞらしい茶番劇としてそのいつわりの仮面を引きちぎられなければならぬ。

現状肯定的レッシング受容から距離をとり、『賢者ナータン』の受容者であると同時に新たな文化を創り出す者として、タボリは『ナータンの死』で過去の野蛮と現在の野蛮を交差させる。過去の清算は現在の批判による。18世紀・19世紀の理想主義的構想からカントとマルクスを経て20世紀、すなわちヒトラー、ホロコーストそしてヒロシマの惨劇の時にまで至る「歴史的ナータン」のたどる道をかくてタボリもたどってゆく。

4. おわりに

しかしながら、ナータンは死んだのだろうか。レッシングが描きだした1779年の理想主義的ナータンがそのままの形で21世紀に通ずるとは何人も思わないだろうが、レッシングが抱くよき意図の理想、すなわち諸宗教の平和的共存、宗教的寛容の理想などが21世紀において無効となったわけでは決してあるまい。ただこの種の理想が道徳的要請などによって達成されることは決してないことは多くの人々の共通の了解であろう。人間の理性は全面的に信頼するには余りに脆弱である。『ナータンの死』は無反省に理性を信ずることの危険性に警告を發し、宗教間の、あるいは衝突する文明間の安易な和解の可能性への幻想からの覚醒を要求する。このような否定性の契機によってこのドラマは現代に関わり、この関わりにおいてナータンは歴史となり、死ぬことはない。信を未来に置く時、絶望もまたありえない。

(ささき・なおのすけ 商学部教授)